

# 文学への姿勢

『文学への姿勢』というのが、私の選んだタイトルですが、大変抽象的で、自分でもどういうことをお話ししようかと、本気になって考えてみました。そもそも文学とは何か、というところから皆さんといろいろ考えてみたいと思います。

私も手がして読む小説、その他の類いを文学と呼んでおりますが、昔は文学少女という言葉がございました。文学少女、文学青年というのがあります、私などは極め付きの文学少女でございます。それで、物心付く頃から字が読めない時には親に「お話して、お話して」とねだってお話を聞くのが大好きでした。字が読めるようになってからは、ありとあらゆる本を読むという喜びが最高という時代に育ったのです。今の時代と大分違いました、ほかに心に触れるもの、楽しみが今ほど多様化されていませんでしたので、物語の中の世界に浸るといふことの喜びを、私などはたっぷり吸収できませんでした。幸いな時代に育ったのではないかと思っています。

文学というものを、どのように定義づけるか私は学者ではございませんので、自分流にいろいろ考えてみたのですけれども、とって

## 山 本 道 子

もむずかしい問題です。いろいろ物語やら、小説やら、私たちは作ったり考えたり読んだりします。世界中のいろいろな話などもすぐ手に取って読むことはできるので、果たしてそれが文学でないのか、それはやはり一人一人の感受性でとらえていくしかないのです。私は、戦時中父の郷里に疎開しておりました、そのとき小学校の二、三年でございました。父は、北支（中国）に出征してしまいましたので、私どもの母は四人の子供を抱えて、毎日大変な寂しい思いをして、大変な時代に子供を育てていたので。その父が復員してきたのが、私が小学校三年のときでした。その頃から、私の自意識が目覚ましい勢いで、目覚めて行ったのではないかと思えます。と、申しますのは父が復員してきたことを作文に書いたのですが、それが文学というもののへの窓口になりました。

そのことでどういうことを感じたかをすこしお話しします。夕方道端で遊んでいますと向こうから兵隊さんが歩いてきました。大きな背囊を持って、軍靴を履いて戦闘帽をかぶって髭が伸びている……その兵隊さんが、向こうから歩いてきました。そのころは、ど

この家でも戦地から帰って来た、帰って来たという話ばかりでしたが、私の父だけなかなか帰って来なくて、いつも子供心に心配していたわけですよ。で、今にも日が暮れそうな時刻で、夕焼けが西の空に真っ赤に燃えている、それが沈んでしまつたら真っ暗になる。そういう背景でしたけれど、向こうから歩いてくる兵隊さんを見ていたら、何か父親のような気がしたのです。それが、本当に父親だったのです。ですから、そのときの感動というか喜びは大変なものでした。まだ幼かったわけですから、父だと分かって飛び付いてわんわん泣きました。その後で大急ぎで走って行って、仕事をしていた母のところへ行つて、お父さんが帰って来たということを告げたのです。そのときの母の顔が、私は今でも脳裏に焼き付いて離れないのです。これが、私の自意識の目覚めではなかつたかと思うのです。母はそのころ三〇代だつたと思いますが、母の顔がパーッと赤くなくて何ともいえない喜びの表情を見せました。けれど何もいみませんでした。母はしっかり子供達を守ってきた昔の女ですから、感情はあまり表現しません。けれど顔がパーッと赤くなり、取るものも取り合えずという感じで走って行つたそのときの表情がとても強烈でした。けれど、私にはその母の喜びの顔が悲しかったのです。小さな子供がどうして母が喜んで顔をみて、一緒に喜んで飛び跳ねて、「帰って来た、帰ってきた、お父さんが帰ってきた」というふうに、踊り上がる喜びにならなかつたのが問題なのです。もちろん喜びは大変なものでしたが、母の喜びの顔が非常にショックでした。子供ながらに、人間の喜ぶ顔を見て、人間の悲哀を感じたのです。人間てかわいそうなものだなんだという感じでした。母の喜ぶ顔から体が震えるような悲しみを得たのです。つまり喜びの底にある

人の哀れを感じたわけですよ。

私は、現在までその時の衝撃が今に残っていますけれど、そういう人間の感情の動きが、私が文学へ向いていったものになったのではと思つてます。

文学というものを、私はそういうふうな角度でとらえ今までひとつひとつ小説を書いてきたと思つています。私の個人的な体験としてささやかな例を挙げました。

私が大変感銘を受ける作家で、バージニア・ウルフという英国の作家がおられます。一八八二年に生まれた作家です。一八八二年というのは、調べてみますとビクトリア時代の末期で、大きな戦争が二つ始まる直前です。ですから戦争を体験しながら作家になつていったわけですよ。少女時代からの日記がごさいます。

この方は、五〇何歳かで最後は自殺するのです。神谷美恵子先生が『バージニア・ウルフ研究』という本の中で、病理学的にどうして自殺をするまでに至つたかということを書いておられます。私は娘時代にたくさんの本を読んだと自負している人間なのですが、バージニア・ウルフは読んでいませんでした。ですから、アメリカに暮らしていた四年間に静かな所でじっくりと全集を読んでみました。それで、バージニア・ウルフ研究に手が伸びたのです。

ご主人のバージニア・レナードという方が、バージニア・ウルフについて書き残したものがあつます。レナードは、バージニアのために出版の仕事を始めまして、この仕事を彼女にも一緒にさせていました。そういう仕事をさせないと、どんどん書くほうにのめりこんでいくわけですよ。バージニア・ウルフは今でいう鬱病にかかつていて、周期的に鬱になります。彼女は、十何歳かで母親を亡くしそ

の後発病したのです。もちろん鬱のときは小説は書けないのですが、生涯に九つの長編を残しています。ある研究者によりますとページニア・ウルフは九つの長編を書いたけれど、生涯にひとつのものが書かなかったという見方をしているひともいます。手を変え品を変えても、それは一つのもので生涯一編のものしか残さなかったとまでいわれている作家なのです。私は、そのページニア・ウルフの研究者の意見もなるほどと思うのですが、ページニア・ウルフのとばの中に、人生のもろもろの事実……、結婚・出産・埋葬、そういうものはすべて自分の生活の一部であって、小説家にとってはそれほど必要なものではない、ということばがあります。それは、友達への手紙に書いたことばです。「もつとも重要なのは、自分の頭のなかでドラマとして作るものである」私はここに非常に感銘を受けました。

ページニア・ウルフに比べるわけではありませんが、私も結婚して二人子供を育て、亭主の勤務先のオーストラリアとかアメリカとかいちいち歩いて歩き回りまして、その間に何冊か本を書いてきたのですけれど、人間にはそういう日常生活がございませぬ。社会的なつながりとともに、人間としての活動があるわけです。でも、私の実感としてはそういうものが自分のすべてではないという思いが、つねに頭の中にあるのです。ですから書くという行為がその下から頭をもたげるわけです。私が作家としてなんとか認められた時は、下の子がまだおむつをしている赤ん坊でした。オーストラリアでは、出産後一年目に詩から小説に移って書き始めました。日常は煩雑で、そんな優雅な生活ではなかったわけです。自然環境の点ではすみにくい外国でした。でもそういう煩雑さの中でも、やはり何か書くし

かないなという気持ちがある中であったのです。

ページニア・ウルフに共感するというのは、そういう人間の行動——子供を育てる、夫と平和な家庭を築く、社会的にうまく調和のとれる生活を続けていく、それからやがて家族との別れ、知人との別れ、そういうものを乗り越えるために精神を養っておく。そういうふうな人間としての修養だけでなく、もつと根底にどうしても自分が欲するものが存在しているという。私が必死になつて物を書いていた時は、好きだから書くという簡単な言葉で片付く状態でした。書かすにはいられないというような悲愴なものではなく、ただ好きだから書く、おもしろいから書くということでしたけれど、そういう理屈では割り切れない気持ちが文学に魅入られた魂ではないかと思うのです。

ページニア・ウルフの言葉の中に、人間の頭の中で自分がドラマを演じていることが一番大事だ、とありますが、実生活とはむしろドラマではないのか、フィクションのドラマではないかという疑いの感覚が私は非常に強いのです。妻であるということ、これはフィクションであっても構わないのです。私が最近書く小説でも、フィクションの中に生きる女みたいなシュールなものを書いてみたいと思つて試みたことがございます。実生活の地面に足がついていない、という見方をされてしまうかもしれない。けれど決してそうではなくて、フィクションの中に、夢・幻の中に日常というものをおいているのではないかということです。日常以外に展開していく自分のドラマが必ずあるはずで、それを言葉で表現しているのが小説家ではないでしょうか。

人間にはいろいろな栄養が必要ですから、文学も人間の一つの栄

養だと私は思うのです。私は、どうして小説を書くか？ 書いても書いてもまだ書き切れない。まだ書く問題があるような気がしています。最近、長いものばかりかいています。三〇〇枚ぐらい書き終わると、もう書けないという脱力感がございまして、もう二度とこれ以上は書かないだろうと思うのです。が、二週間ぐらい経ちますと、ムラムラしましてまた書いてしまうのです。ですからこれは果てしない行為だと思えます。

パージニア・ウルフの言葉で「文学というものは人生の果てしない混乱を書くものだ」というのがあります。私もこの言葉を借りると全くその通りで、人間はなんとこの混乱のなかで生きていくのかということなのです。もちろん数字では割り切れない感情の動き、私が幼児の時に体験した怪しげな感情の動き、母親の喜びの表情が突き刺さるように悲しかったということ。そういう複雑な奇々怪々とした人間の感情の動きは、人間の混乱としか私には考えられないのです。人間に生まれてきて、混乱の中に生き続ける私たちにとって文学というものは、欠くべからざるものです。それは説明するために絵画とか音楽とか、あらゆるものがありますが、言葉で説得できるものは文学だけだと思います。

前にも申しましたが私の世代は日常茶飯事に文学に触れてきた人間で、親も文学青年でした。家の中には手の届くところに文学全集やら翻訳本があり、私もずいぶん若い時からチェーホフや、ドストエフスキイを読んでいた。私が、一番始めに好意を持った男性が『罪と罰』のラスコーリニコフでした。あんなまがまがしい男性にどうしてお熱を上げたのか、友達に打ち明けるのも恥ずかしいと思いました。次に好きになったのが啄木です。この人は実存する

人ですが、歌集なんか見るとハンサムに写っています。でもそんなにスマートな男性ではなく、「可哀相な啄木」です。私はひとり娘で、父にとてもかわいがれ、散歩しながら一つ一つ啄木の歌を教えられたのです。小学校ぐらいの子供は、どんどん覚えるものです。それが小さいころはそれほどなかったのですが、中学に上がったころに啄木が大好きになったのです。

次には、(あまりに有名な人ばかり好きになってしまったのですが)ビンセント・パン・ゴッホが好きになりました。耳を刺り落として、異常な神経を持ち合わせた絵描きというのは近寄り難いのですが、ゴッホの本で『テオへの手紙』というのがあります。あれを読んだら本当にゴッホが好きになりました。ですから私なんかは皆さんと違って本の中、フィクションの中で恋愛をしてきたので、いつの日かそれが現実となってもどうもうまいかない、生身の男性が目の前に現われても、今まで空想の中で男の人に惚れていたわけですから、それが日常的なものにピタッと合わない。どうも、生きた人間とうまいかないわけです。友達程度に終わらせておけばまあまあ長持ちする感じですが——。考えてみるとそういう具合に、フィクションの中で恋愛していたような人間ですから、まあパージニア・ウルフに共感するというのも自分で筋が通っているなあと思うのです。

話が変わりますが、私の『ペティさんの庭』の中では、三人の男の子を育てている女の人が主人公です。またある短編にも男の子が出てきます。昔、ある男の小説家に会ったら「山本さんあの坊や元氣？」とおっしゃるのです。「ええっ？ 私には娘しかいないんですけれど……」と言ったんですけれど、その短編の中に男の子が出てく

るのでその作家は、私がまさに私小説を書いたと判断されたのです。住んでる環境などまるで私のことですから、子供もそんな小学生の一人息子がいると思われたのでしょう。その作家は、へえという顔をなさり少し間がありました。私の文章を書く資質をほめて下さいました。私がさも男の子を育てて、その男の子を小説に書いたようにそのベテラン作家は思ったのです。私は、裏切ったような申し訳ない気持ちで致しました。女だからああい味が出るのかなあとおっしゃいました。私はいろいろな人と関わり合いながら今日まできたわけです。男の子のことだつて知らない世界でもなんでもない。

この話から、私小説というのを広げていくとおもしろいのですけれど、私は文学というのは、そもそも私小説だと思っています。どんなにフィクションをたてて膨大な長編小説を書く方でも、絵空事全くありもしないことを書いている小説はないのです。単なる読み物の中では、あちこちから資料を拾ってきてつなぎ合わせるという作業も必要です。けれど本当に小説を書きたいという人は、私小説を書いて、そういう見方をしたほうが早いと思います。奇想天外な話の中にも作家自身がいるわけです。その人の私生活がスケスケにみえる、そこがまたおもしろいところです。

たとえば、ドストエフスキーの生涯とか、ああい内輪話を読むのはおもしろい。一人の人がどのように生きて、どのように死んだか、これを書いた時どんな精神状態であったか、そういう菜屋話を読むのは興味があると思います。私はそういうのも大好きで、バージニア・ウルフの研究書や、夫のノーマンの書を小説と併せて読みます。すると、作家と文学の隙間がなくなり、その人の生き方と作品とどちらが文学だかわからなくなります。そのような気持ちを持

って文学に接していただくと、皆さんも心を震わせるような素晴らしい作品にどんどん巡り合えると思います。

最後に簡単に申し上げたいことは、人間の「生涯」というのは、生のみぎわと書くということ。私たちは生涯を生きなければいけないのです、すれすれの今にも崖から落ちそうなところで生きています。男に生まれたり、女に生まれたりするその生の崖っぷちを、自分が現在生きているのだとはつきり自覚されることがままあるのではと思います。長い人生の間には、いろいろな機微があるかもしれません。けれど全部総合した中で、私たちは決して楽なところにも生まれてきたのではない、足場の悪い一つ間違えば無になってしまふところにいるのです。そういう自分たちの存在があやういものであることを、非常にひりひりした感覚でつねに受け止められるという喜びがあります。私は、そういう危機感が大好きです。

人間の生涯というのは決して生やさしいものではない、危ないところ立っているという自覚を持つと、明日から生き方が変わってくると思います。その上で気に入った小説を読んでいただくと、それにも断崖絶壁が出てきて、作家の喜びやひりひりした悲しみまたおかしみもあります。その中に自分びつたりの、またそっくりの人が出てくる。そこで、そういうものを製造する立場になつてもいいわけです。断崖絶壁に立って書いてみると、危険な、わくわくするような、どぎまぎするようなそんな生涯が送れると思います。

今日は、文学への姿勢という抽象的なタイトルでございますけれど、私が文学をどのように受け止めているかということをお話ししました。

(平成元年六月二十四日、第二十四回文芸学会の講演から)